

認知言語学の潮流

—その背景と展開—

岡本 順治

1. はじめに

言語学は、20世紀に2回の認知論的転回を経験した。¹⁾

第1期は、1956年頃の認知科学 (Kognitionswissenschaft) の成立時期である。認知科学は「人間の知的能力一般 (Mind) の解明をめざす」学際的研究²⁾ である。当時認知科学の成立³⁾ にかかわった言語学は、実は N. Chomsky の生成文法であり、当時の認知科学への貢献とは、次の2つの点に集約できる。ひとつは、C. E. Shannon らの有限状態文法では自然言語が記述できず、Z. Harris の発案である変形操作を加えることにより初めてそれが可能であることを示したこと。もうひとつは、当時のアメリカ構造主義の記述言語学に対して、仮説演繹的な言語モデルを採り入れることにより言語現象を説明しようとしたことである。周知のように、生成文法はその後、標準理論に至る過程で「統語論の自律性」と「言語能力の生得性」を明確に主張するようになり、認知的色彩を強めて行く。

第2期は、1970年代で、Rosch (1975) に触発されたプロトタイプ的カテゴリー論と、ゲシュタルト心理学の知覚研究に「認知」の本質を求める流れである。特に、認知心理学と人工知能研究での知識情報処理からの影響が当初は顕著であった。Fillmore (1975), Miller/Johnson-Laird (1976), Lakoff (1977), Talmy (1978), Jackendoff (1978), Fauconnier (1979) に端を発したこの流れは、1980年代に入り本格化する。⁴⁾

認知言語学の短い歴史を振り返ると、認知的研究方向は、生成文法も含む大きな言語学の流れとして位置づけることができる。それ以前の構造主義言語学とは対照的に、広い意味での認知言語学は、個別言語の構造をただ単に記述することを最終目標にするのではなく、「人間が共通して持つ言語」という普遍論の立場から人間の言語の本質や、言語現象の説明を目指していると言うことができる。

¹⁾ もちろん、言語学すべての分野に「認知」という概念が浸透したわけではない。なお、本稿では、紙面の都合から音声・音韻論関係、心理・神経言語学関係の認知的研究に触れる余裕はない。

²⁾ Münch (1992) 参照。

³⁾ Gardner (1985) 参照。認知科学の成立に密接にかかわったのは、心理学、哲学、言語学、計算機科学、人類学、神経科学である。人工知能研究は、認知科学の実学的側面として注目された。

⁴⁾ 生成文法にとっても、1980年代は、統率と束縛の理論(いわゆるGB理論)を契機とした、第2次認知革命であった。

本稿では、いくつかの核となる概念を中心に「広い意味での認知言語学⁵⁾」の流れを、認知の計算主義、全体論、「認知論からの補完」主義の3つに分けて論じ、認知言語学の特徴を明らかにする。その中で、本特集で投稿された論文に触れ、全体の中でのそれぞれの研究の背景と位置づけをする。最後に、今後の認知言語学の発展の方向性に関して、若干の考察を加える。

2. 認知の計算主義

「計算主義」(Computationalism)とは、Dennett (1984) がアメリカでの認知科学の動向を説明する時に用いた用語で、ここでの反意語は「全体主義」(Holism)である。認知の計算主義は、次の3つの仮定に基づいて成り立っている。⁶⁾

- (1) 思考は情報処理である。
- (2) 情報処理は計算(記号処理)である。
- (3) これらの記号の意味論は思考を外的世界へと結びつける。

言語が思考と密接に関係した認知体系だとすると、(1)、(2)から「言語が計算(記号処理)に基づいた一種の情報処理である」と帰結することができる。人間の認知能力をこのように計算によって成り立っていると仮定するならば、あたかもコンピュータによる情報処理のように、心(Mind)の認知過程は、モジュール化したプログラムの集合であり、プログラムが脳の中で実行されているという唯物論に立つことになる。また、(3)から見えてくる意味論は、記号とその指示物を対象とする論理実証主義である。

計算主義の特徴は、上述の3つの仮定と密接に結びつく。記号処理をする前提から、その入力「離散的」(diskret)な記号列でなければならず、形成規則によって生成(計算)され、文字列の解析(解釈)はその逆のプロセスをたどるパーサ(parser)として実現される。

2.1. 生成文法

認知言語学の中で、このような計算主義的立場を貫くのは、まず生成文法である。Chomsky (1981)以降の「統率と束縛の理論」(いわゆるGB理論)は、一方では「原理とパラメタのアプローチ」(principles-and-parameters approach)とも呼ばれ、「普遍文法(UG)は有限個の原理と、その原理に組み込まれたパラメタからなる」という仮説に基づいて発展した。普遍文法とは、言語獲得機構(language acquisition device, LAD)の中核部であり、言語能力(Faculty of Language)の初期状態と仮定される。このLADは、Chomsky (1986)で明示的に述べられたように、「不完全で断片的な言語資料にさらされた子供が、なぜそんなに短期間の内に言語を獲得できるのか」という刺激の貧困の

⁵⁾ 現在出版されている認知言語学の入門書は、主にR. Langackerの「認知文法論」(Cognitive Grammar)と、G. Lakoffの「認知意味論」を取りあげたものが多い。これを仮に「狭い意味での認知言語学」と呼ぶことにする。山梨(1995)、吉村(1995)、Unge-
rer/Schmid (1996)、河上(1996)参照。以下では、特にことわらない限り「認知言語学」と言う時は、「広い意味での認知言語学」を指す。

⁶⁾ Dennett (1984)の日本語訳 Dennett (1986:201)からの引用。

問題 (あるいはプラトンの問題) に答えられるように構成される。このようなモデルに沿って考えると、生得的な言語能力を持つ (つまり、UG を脳の中に持つ) 人間の幼児は、特定の言語が話されている環境で (不完全な) 言語資料に触れつつ、「ある種の方法で」特定言語のパラメタを効率よく設定し、大人の文法を獲得することになる。

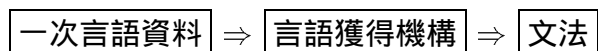


図1：生成文法における言語獲得モデル

このパラメタの設定のきっかけを与えるものは、幼児が観察可能なデータの中に存在するはずだ。Gibson/Wexler (1994) は、このような言語データをトリガー (trigger), Dresher (1999) は、キュー (cue) と呼んでいる。野村論文では、母語としてドイツ語を獲得する場合にどのようにパラメタの設定がなされるかをキューとの関係から扱っている。

さて、人間が生まれながらに言語を獲得できる能力を持つことは、経験的に知られた事実である。しかし、脳の活動を捉える、現在急速に発達しつつある PET, fMRI, MEG, ERP⁷⁾ といった測定法を使っても、脳内の具体的活動と高次の言語処理の関係をいまだに満足のいくほど特定できてはいない。⁸⁾ 人間の言語の設計図が脳の中に UG という形で存在するとしたら、それは、かなり緻密な強い制限が加わったものであると同時に、パラメタの設定次第で、多様な個別言語を作り出されねばならないことになる。生成文法は、果たして本当に究極の UG にたどりつけるのだろうか。

現在、生成文法は、極小プログラム (Minimalist Program) と呼ばれるモデルに行きついている。このモデルにおいて、言語機能は、少なくとも2つの下位部門を持つ。それは、言語に関する情報を貯蔵する認知システム、そしてそれを使用する運用システムである。運用システムには、「音声」をつかさどる調音・知覚システムと、「意味」をつかさどる概念・意図システムが想定されている。このモデルでは、言語機能の認知システムは自律的であるが、言語の運用システムによって動機づけられているとする点で、これまで以上に認知的特性を深く考慮した簡素なものとなっている。⁹⁾

2.2. 意味のモデル

認知的な計算モデルの中で、状況意味論 (situation semantics) は、それまでの形式意味論 (特に、モンターギユ意味論) とは決別した形で登場した。Barwise/Perry (1983) は、人間の認知活動を、それまでの実在論の中で漠然と「世界」と呼ばれていた絶対的な存在から、状況という部分的な、知覚可能な対象に向けられているとした。その際に論拠となった考え方は、Gibson (1979) で提唱された生態学的実在論 (Ecological Realism)

⁷⁾ PET=ポジトロン放出性コンピュータ断層撮影装置, fMRI=機能的磁気共鳴イメージング法, MEG=脳磁図, ERP=事象関連電位の略。

⁸⁾ たとえば、山鳥 (1999) 参照。言語処理と脳の活動に関するある程度の相関関係は、すでに高沢他 (1997) などの報告がある。

⁹⁾ 詳しくは、田窪他 (1998:166ff) 参照。

である。従来の視覚心理学では、「見る」ことを、概略、光の刺激を受けてできた網膜上の静止像から対象の性質を分解することと見なしていた。これに対して、Gibsonは、特定の生き物が環境の中にある物を知覚する時、その環境の中にある不変項 (invariant) のみを取り出す、と考えた。この時、「周囲の環境の中に在る物が、特定の生き物に情報を提供する」。これをアフォーダンス (affordance) と呼ぶ。たとえば「本」は、人間にとって「読むこと」をアフォードするが、特定の昆虫にとっては「食べること」をアフォードするかもしれない。このように、混然一体とした環境の中から、生体が特定の情報を取り出すことができる背後には、特定の生体にとって知覚される情報が状況の中に実在しているからである。状況意味論では、状況間で共有される要素を斉一性 (uniformity) と呼び、個々の状況は分類されて、タイプが与えられ、意味は、特定の発話状況において、どのような情報が伝わるかを、物、時空における位置、属性、関係から定義することになる。

このアフォーダンスという概念は、大矢論文の中で、認知言語学的な中間構文の説明に登場する。大矢論文では、2つの認知言語学的な中間構文の分析が示されるが、創造動詞ならびに授与動詞に限って見ると、英語とドイツ語の中間構文の違いを説明できないことが示されている。最終的に、大矢論文は生成文法の中に位置付けられる格吸収のメカニズムにその説明を求めている。この結論は、計算主義 (記号列処理の形式システム) の文法の方が個別言語現象に対してより多くの説明力を持つ、ということを示している。¹⁰⁾

形式意味論に異義を唱える形で登場した、Jackendoff (1983, 1990) の概念構造理論は、意味の内在説、つまり、意味のメンタル表示 (mental representation) にその本質を求めた点では、状況意味論とは正反対の立場にある。意味論と語用論の区別を取り払い、メンタル表示にふさわしいようなプリミティブを立てることによって構成された概念構造 (Conceptual Structures) は、Gruber (1965) の主題役割 (thematic relations) を基礎に置く。その結果、場所と移動を中心とした概念構造が作られる。¹¹⁾ しかし、基本的に R. Jackendoff の概念構造は、統語論として X バー理論を想定して作られ、統語論との同型性を維持しようとしているため、後の「語の構造」に注目した項構造 (argument structures) の研究の中で、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structures, LCS) として受け入れられるに至った。統語論との同型性が果たしてどの程度可能なのかには疑問が残るが、計算主義の統語論と結びついた研究である点には疑いはない。¹²⁾

計算主義の最後に M. Bierwisch の認知モデルに触れておこう。M. Bierwisch は、生

¹⁰⁾ たとえば『月刊言語』Vol.26, No.5 ~ No.8 (1997)で繰り上げられた中島平三、西村義樹の往復書簡の中で繰り上げられた「繰り上げ構文」の議論にも似たような構図がある。生成文法は、言語獲得のモデルという面を除いても、豊富な規則の体系であることから、説明力は豊かであるが、反面、抽象的な規則の持つ「過剰生成」という問題を常にかかえている。これは認知科学で問題にされた「フレーム問題」と類似した破綻をきたす恐れがある。フレーム問題に関しては、松原 (1990) 参照。

¹¹⁾ たとえば、GOという移動を表す関数で、状態変化、所有権の変化を表す。

¹²⁾ LCSと言語獲得に関しては、Pinker (1989)を参照。

成文法の中に独自の意味論を持ち込むモデルを 1980 年代から提唱している。Bierwisch (1983), Bierwisch/Schreuder (1992) で概観することができるモデルは、俗に「二層意味論」(Zwei-Ebenen-Semantik) と呼ばれる。この理論によれば、ある言語の表現の解釈は、意味形式 (Semantische Form, SF) から概念構造 (konzeptuelle Struktur, CS) への写像として定義される。SF は、ラムダ抽象を使った意味表記で、範疇文法によって統語構造と結びつけられる。SF は、特定言語の表現の論理形式であると考えられるが、CS は、特定言語に依存しない普遍的な性質を持ち、かつ文脈情報を取り込むことで解釈されるレベルである。¹³⁾ このアプローチからの分析としては、これまで空間関係を表す形容詞や前置詞、分離・非分離動詞の分析が精力的に行われている。

後続の保阪論文では、生成文法とこの「二層意味論」で項構造の分析がどのように異なるかが吟味されている。SF と CS という 2 つのレベルが果たして本当に認知的に妥当な区別なのかが問われるが、それに加えて統語現象の説明に関しても、不十分な点が残されている。¹⁴⁾

3. 認知の全体論

認知言語学の全体論とは、言語に関する認知能力が、生成文法の仮定するような「モジュール形式で、他の認知能力とは独立している」と考えない立場を指す。即ち「言語に関する認知能力は、他の認知能力と関係しあっており不可分の全体をなしている」という立場であり、信念でもある。従って、同じように人間の言語に関する認知能力の解明といっても、計算主義とはさまざまな点で相容れない考え方に貫かれている。計算主義では、システムは離散的な記号化に基づいて演繹的に作られるのに対して、全体論では、言語に関するカテゴリーはそもそも「連続的」(kontinuierlich) であり、家族的類似性 (family resemblance) を示すものとして捉えられる。そして、言語表現は基本的に文脈依存の形で意味づけられ、さまざまな言語レベルの相互関係から言語現象が説明されることになる。

意味が環境の中に存在するというアフォーダンスに対し、H. Maturana の「オートポイエーシス」(autopoiesis) は、意味内在論に肯定的な神経生物学の知見である。Maturana/Verela (1991) によれば、神経系とは相互作用しあう神経細胞の「閉じたネットワーク」であり「自分自身の構造に従って自己回帰的・自己言及的にみずからの構造を作り出すシステム」である。この自己創出的システムの性質をオートポイエーシス¹⁵⁾ と呼ぶ。人間の認知に的を絞って、いささか極論すれば、人間という観察者から独立して情報が客観的に実在するわけではなく、観察者の行動に伴って情報が生まれること

¹³⁾ SF と CS という 2 つの意味表示レベルが具体的にどのように違うかは、Lang (1994) が詳しい。従来の意味論と語用論の区別とは違った性格の 2 つのレベルであることに注意。CS は、Jackendoff とは違った存在論 (Ontologie) に基づいており、Dölling (1994) に見られるような類論理を前提としている。

¹⁴⁾ 二層意味論に関する批判は、Taylor (1994, 1995) を参照。

¹⁵⁾ ドイツ語では、Riegas/Vetter (1993) がオートポイエーシスと認知の関係の論文を集めたものとして参考になる。

になる。言語にあてはめれば、人間は単純に外界から情報・意味を得るのではなく、情報・意味を作り出す存在であるという主張につながる。¹⁶⁾ この神経生物学から発した理論は、全体論的認知観を強く後押しするものであろう。

さて、多かれ少なかれここでの全体論に組する認知言語学の研究は、かなりの数にのぼる。メタファー論・認知意味論の、Lakoff/Johnson (1980), Brugman (1981), Lindner (1981), Lakoff (1987), Sweetser (1988, 1990), 認知文法の、Langacker (1986, 1987, 1990, 1991)「力のダイナミクス」(Force Dynamics)を提唱した Talmy (1988), Talmy の枠組を拡張して独自の事象構造 (Event Structures) を提案した Croft (1990, 1991), 言語的カテゴリー化の包括的研究を提示した Taylor (1989, 1995²⁾), 構文文法 (Construction Grammar) の Fillmore/Kay/O'Connor (1988), Goldberg (1995) などである。

以下では、その中から、本特集と関係の深い W. Langacker の認知文法と G. Lakoff らの認知意味論の背景を概観しよう。

3.1. 認知文法

1976 年から、R. Langacker によって始められた認知文法は、言語を自律した認知処理系だとは考えない。文法構造は、概念内容の構造的で慣習的な記号化 (symbolization) を提供するもので、語彙、形態論、統語論は独立して存在しているというよりも、協調してこの記号的単位の連続体を作り出している。人が特定の文法構造を選択することは、情報伝達の目的のために知覚された状況を構造化するために特定のイメージを選択することに他ならない。その結果、ある言語における構文は、意味に対して特定のプロファイル (profile)(=焦点化される部分構造) を付与するものと考えられる。

認知文法に従えば、(1a), (1b) の例文は、プロファイルされた事象の別々の状況解釈 (construal) を示しており、意味も異なる。基本的な意味は、確かに「ビルがセイウチをジョイスに贈った」ことを意味するが、(1a) では、to Joyce の部分が、(1b) では、参与者 Joyce (の所有) が際立っている。よって、二重目的語構文である (1b) の Joyce の位置に Antarctica のような場所を示す語を置くと奇妙な文になる。

- (1) a. Bill sent a walrus to Joyce.
b. Bill sent Joyce a walrus. Langacker (1991:13)

(1) の例文で、移動する物は、参与者との間でより際立つものなので、トラジェクター (trajector) と呼ばれ、トラジェクターの基準点となるものがランドマーク (landmark) と呼ばれる。用語こそ異なるものの、基本的考え方は、ゲシュタルト心理学での「図と地」の関係に対応している。「認知的に際立つ」¹⁷⁾ というのは、久野の機能文法で話者の視点を「エンパシー」(empathy) として説明するのと部分的には同じ現象を捉えていることになる。三瓶論文は、この「視点」の問題を認知的距離という概念で捉えようと

¹⁶⁾ Winograd/Flores (1986) は、人工知能批判にこのオートポイエーシスという考えを取り込んでいる。

¹⁷⁾ 「認知的に際立つ」とは cognitively salient と呼ばれたり「プロファイルする」と呼ばれたりする。

している。そこでは話者の視点が、言語現象のさまざまなレベル(指示代名詞、態、特定の動詞の項構造、話法の選択)で関与していることが示されている。

Langacker (1990) で示されたビリヤードモデルは、さらに認知的に一般化したモデルである。「行為」と「状態」双方を含む上位概念として事象(event)を捉えると、その構成要素は、事象の参与者とその関係であるとする。関係は、エネルギーの伝達を含むものと、含まないものに分けられる。エネルギーの伝達の在り方は、本来は物理的な出来事であるが、言語的にもそれが反映されていると考え¹⁸⁾ ネットワーク状に伝搬される。この伝搬路をアクション・チェーンと呼び、 で囲った参与者間を矢印(\Rightarrow)(=エネルギーの伝達)で結び、参与者の状態変化を受けた部分を波形の矢印(\rightsquigarrow)で示す。プロファイルされた部分は太線で示される。このようなモデルを使った分析が、坂本論文であり、ドイツ語の中間構文が、同じ表面的な形式(NP V sich)を持つ再帰的能格構文やその他の再帰構文と連続的な統一体をなす、との観点から分析されている。生成文法での分析とは異なり、人間の持つ知識や中間構文の典型性が論点となっている。

3.2. メタファー論と身体主義

Lakoff/Johnson (1980) は、言語表現に現れるメタファーが人間の認識と密接に関わることを示した認知的メタファー論の最初の研究である。下地となっているのは、それまでの離散的カテゴリーを構成的に組み上げて行く意味論に対してのアンチテーゼである。

「議論」という語の意味を考えてみよう。離散的カテゴリーを使つての従来の成分分析では、たとえば、文法素性が[+抽象]、意味素性が[+複数の参加者][+話す]、[+話題]のような形しか思いつかない。しかし、人間は、自分自身の経験から「議論」とは何かをメタファーとして知っている。その例として <議論とは戦争である>、<議論とは容器である>、<議論とは建物である>というメタファーを考えてみよう。この3つのメタファーは、「議論」という抽象概念を「戦争」「容器」「建物」に例えているのだが、実際、人間が「議論」という概念を理解する時には、まさにこれらの「戦争、容器、建物」という概念を仲介していると考えることができる。

- (2) その議論で、原告側は敗退した。
- (3) この議論は、全く中身がない。
- (4) この議論を建て直すには、相当の努力がいる。

「議論」という語は、ここで最小の意味単位に分解されるのではなく、ある時は「戦争」というメタファーで、ある時は「容器」というメタファーで語られている。「建物」のメタファーで「議論」を語る時には「戦争」のメタファーは出てこない。つまり、1) 「戦争、容器、建物」という概念が基礎になり、「議論」を定義しており、2) これらの概念は、さらに経験的基盤によって得られた知識で構成されており、3) ひとつのメタ

¹⁸⁾ エネルギーの伝達モデル自体は、Talmy (1988) で「力のダイナミクス」としてすでに導入されている。

ファーで「議論」を概念化する時には、他のメタファーは隠蔽される、という特徴を示す。

では、典型的な「建物」について、われわれはどのような知識を持っているのだろうか。「屋根があり、部屋があり、柱があり、土台がある」という、ごく常識的な知識がその構造の基本をなしていると考えられている。この知識構造の考え方は、人工知能研究から引き継がれたもので、¹⁹⁾ 百科事典的な知識を取り入れた、人間が日常生活の中で経験的に常識として知っている知識の抽象的集合体である。²⁰⁾ このように、Lakoff/Johnson (1980) のメタファー論は、身体を持った人間がどのような経験をしてどのような知識を得ているかを重視しているので、Lakoff (1987) では、自らの立場を経験主義 (Experientialism) と呼び、Lakoff/Johnson (1999) では、さらに「人間の心 (Mind) が肉体にやどる」 (Mind in the Flesh) という立場を鮮明にする。²¹⁾

Lakoff/Johnson (1999:267) によれば、主体 (Subject) とは、「意識、主観的経験、理性、意志の場」であり、自己 (Self) とは、「肉体、社会的役割、個人の歴史などで構成される (多くの場合) 複数の人格、もの、あるいは場所」である。個人の内面生活 (inner lives) とは、この主体と自己が別々に認識されるところから説明される。たとえば、主体・自己のメタファーには、<自己のコントロールは、物体を強制的に動かすこと> が含まれている。(5) のように発話したとしよう。

(5) Ich habe meinen Arm gehoben.

(5) の文は、少なくとも2通りの解釈ができる。ひとつは、自分の片方の手で、もう片方の腕をつかんで持ち上げたという意味、もうひとつは、自己コントロールで腕を上げたというのが文字通りの意味である。²²⁾ 自分の腕があたかも別の物体のように動かされるにもかかわらず、主体からの認識では、自己コントロールとして把握されている。ここでの曖昧性は、主体と自己の関係の違いから説明されうるのである。

竹内論文では、Lakoff/Johnson (1999) の「主体・自己のメタファー」 (Subject-Self metaphor) の分析を拡張し、「主体的人格」のさまざまな現れ方が、文法的な主格 (Nominativ) に投影されていると主張している。「主体的人格」とは、主体・自己のメタファーを包括するもので、これが文法的な主格の意味に投影されているため、これほどまでに主格の意味が多様に見える、としている。

¹⁹⁾ Schank/Abelson (1977) のレストラン・スクリプトが有名。

²⁰⁾ ここでは日本語の例で考察した。Lakoff/Johnson (1980) では、“ARGUMENT IS WAR”, “ARGUMENT IS A CONTAINER”, “ARGUMENT IS A BUILDING”となっている。このようなメタファーがどの程度、普遍的な性格を持つのかは、議論の余地があるが、たとえば「建物」に関する経験的な理解は、当然個別言語の文化による違いを反映すると考えられる。

²¹⁾ その結果、M. Merleau-Ponty の知覚論を高く評価することになる。

²²⁾ 実際には、「合図のために自分の手を高く上げる」という解釈が慣習化された解釈。

4. 「認知論からの補完」主義

最後に認知言語観を補完的に利用している研究をいくつか紹介する。ひとつは、語用論を出発点としながら、認知論的観点を取り込んで発展している Sperber/Wilson (1986/95²⁾ の関連性 (Relevance) の理論、もうひとつは類像性 (iconicity) を言語類型論に持ち込んだ Haiman (1980) の研究である。

関連性理論とは、一口で言うならば「発話がいかに理解されるか」に関する理論である。その基本には、人間が発話を理解する際には、関連性のあると思われる情報を (主体的に) ピックアップするという観察がある。そこで、人間の認知とコミュニケーションに対して2つの基本的な主張をすることになる。

- 1) 人間の認知 (Human cognition) は、関連性が最大になるようにできている。
- 2) すべての意図明示的伝達行為は、それ自身最適の関連性が在るという推定を伝達する。(Sperber/Wilson 1995: 260)

ここでの関連性とは、認知的コストと利益の関係についての概念である。聞き手がある発話を理解しようとした時の期待する認知的利益とは、聞き手の世界に対する既存の想定を修正することであり、認知的コストとは、この修正をするのに必要な労力を指す。

このような解釈に立つと、これまでの語用論で論じられてきた文脈 (context) の位置づけが全く異なったものとなる。即ち、ある発話の文脈とは「初めから与えられているものではなく、人間が主体的に決定して関連性を吟味するもの」である。

(6) のような単純な例を考えてみる。Thomas の発言 (a) に対して、Luise が (b) のように答えたとする。

- (6) a. Thomas: Ich habe einen Bärenhunger.
- b. Luise: Ich koche dir was.

Luise の側から考えると、「とてもおなかがすいている」と発言した Thomas の発話を聞いて、Luise は、関連性を主体的に見出して (この場合は、Thomas が「きっと何か料理を作ってくれ」と期待している」と考えて) このように発話している。つまり、Luise は、認知的発話状況を主体的に解釈しているのであり、特定の発話状況がア priori に存在するのではない。状況の関連性を最大にするように行動する結果、(6b) ではなく「レストランへ行こう」と提案する場合もありうる。

関連性理論は、発話の解釈という意味で、談話上の推論の分析に新しい一石を投じたもので、²³⁾ 従来から文脈依存性の高いと思われていた表現、たとえば不変化詞 (Partikeln) の分析にも応用が始まっている。²⁴⁾

²³⁾ P. Grice の「会話の含意」の認知論的発展形であると捉えることもできる。推論に関しての認知論的発展の中には、Fauconnier (1979,1985) のメンタル・スペースも重要な位置を占める。

²⁴⁾ Blakemore (1987), König (1991) 参照。

Haiman (1980, 1985a) は、文法の類像性を正面から取り扱った類型論的研究である。F. de Saussure 以来の伝統から、言語記号の形式と意味の関係は恣意的 (arbitrary) であるという認識が広まったが、それに対して、「形式と意味は関連している」という考え方が広まっている。Haiman (1980) は、1) 形式と意味の間に対応性があること (同型性, isomorphism), 2) 言語構造が現実の構造の一部を直接反映する (動機づけの類像性, iconicity of motivation) ことを主張している。ここでの同型性は、平易な言葉で表現するなら「言語形式がことなれば、意味も異なる」²⁵⁾ という基本的立場であり、L. Hjelmslev, D. Bolinger, A. Martinet などによって表明されてきた見解でもある。言語の記述的研究においては、言語形式の緻密な観察が必要不可欠であるが、言語学者にとって明示的に確定できるのは、まず第一に形式の違いであり、次に意味 (指示内容) の検討である。意味の分析には、言語外の状況から得られる情報や、話者の持つ知識が当然のことながら必要になる。

動機づけの類像性は、必ずしも普遍的な性格を持つ原理ではないが、線状的な出来事の解釈が語順に反映されるような現象を指す。個別言語によっては、線状的解釈をブロックするような構文やテンスもあるが、単文の連続は明かにその順序で事態が変化していくことを表す場合が多い。

小川論文では、この動機づけと同型性の類像性 (有契性) を普遍的説明原理とすることで、類型論において、より説得力のある言語間の共通性と差異が説明ができることが示されている。言語の記述的研究は、言語現象の説明的研究に先立つものとして必要であるという認識がある。どんなに優れた言語理論であっても、基礎的なデータとその包括的な記述が無ければ、いきなり説明原理を持ち込むことはできない。個別言語の研究も、認知論的な普遍的基盤からの原理を持ち込むことにより、より豊かな研究へと発展する可能性を秘めていると言える。

5. 結語

本稿では、認知言語学と称する研究の流れを、計算論と全体論に分けられることにより概観した。全体論から計算論を見ると、それは基本的言語観が全く異なる間違っただ方針のもとで行われている研究であると位置づけられる。計算論から全体論の言語分析を見ると、個々の現象の説明に考慮されていない現象が含まれていると写る場合もある。しかし、この2つの観点は、実は言語の性質を説明する上で、補完しあっているのではないだろうか。その関係は、ちょうどアフォーダンスとオートポエシスの関係と同じで、どちらの立場も 100% 現象を説明する原理だとは考えにくい。

認知言語学のもたらした影響は、この様に他方面に及ぶが、裏の一面としては、かつての文法家が直観的に指摘していた事を、理論的に位置づけるという色彩も持つ。たとえば、近接性の原則という名で、認知言語学で理解されているものは、Behaghel (1932: 4) が「心的に緊密に関連するものは、近い位置に置かれる」と呼ぶものと対応してい

²⁵⁾ 意味が異なることが、言語形式が異なることを動機づけているとも考えることができ、もし2つの異なった形式が真に同じ意味ならば、同時に2つの形式が存在する意味は無くなってしまう。

るだろう。

また、身体論は、これまで欠けていた人間という主体を言語学の中に位置づけるものとして期待できるし、関連した脳生理学や心理学の研究もさらに盛んになることが予想される。²⁶⁾ さらに、言語を複雑系として捉えたり、物理学から「心」の解明をしようとするアプローチ²⁷⁾ が現れ、脳の認知活動がより細かく観察可能になりつつある現状をふまえると、これからむしろ本格的な認知革命が起こり、言語の科学が急転回する可能性もある。

参考文献

- Bailey, D. (1997): A Computational Model of Embodiment in the Acquisition of Action Verbs. Ph.D. dissertation. University of California, Berkeley.
- Barwise, Jon/Perry, John. (1983): Situations and Attitudes. Cambridge, Mass.:MIT Press.
- (1989): Situationen und Einstellungen: Grundlagen der Situationssemantik. Berlin: de Gruyter. 土屋俊/鈴木浩之/白井英俊/片桐恭弘/向井国昭 (訳) (1983) :『状況と態度』産業図書
- Behaghel, Otto. (1932): Deutsche Syntax. Bd. IV. Heidelberg: Carl Winter.
- Bierwisch, Manfred. (1983): Semantische und konzeptuelle Repräsentation lexikalischer Einheiten. In: Ružička, Rudolf/ Motsch, Wolfgang. (eds.) Untersuchungen zur Semantik. Berlin: Akademie Verlag. 61-99.
- Bierwisch, Manfred/Schreuder, Robert. (1992): From Concepts to Lexical Items. In: Cognition 42, 23-60.
- Chomsky, Noam. (1986): Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use. New York: Praeger.
- Blakemore, Diane. (1987): Semantic Constraints on Relevance. Oxford: Blackwell.
- Croft, William. (1990): Possible Verbs and the Structure of Events. In: Tsohatzidis, Savas L. (ed.) Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization. London: Routledge. 8-73.
- Croft, William. (1991): Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information. Chicago: University of Chicago Press.
- Dennet, Daniel C. (1984): The Logical Geography of Computational Approaches: A View from the East Pole. 野矢茂樹 (訳) 「計算主義を巡る論理地図：東極からの眺め」 In: (1986): 『認知科学の基底』産業図書, 197-227.
- Dölling, Johannes. (1994): Sortale Selektionsbeschränkungen und systematische Bedeutungsvariationen. In: Schwarz, Monika. (ed.) Kognitive Semantik: Ergebnisse, Probleme, Perspektiven. Tübingen: Narr. 41-59.
- Dresher, B. E. (1999): Charting the learning path: Cues to parameter setting. In: Linguistic Inquiry 30, 27-67.

²⁶⁾ 言語能力のモジュール性に対して肯定的な観察には Smith/Tsimpli (1995), 言語能力が他の認知能力と結びついていることを主張するものに, Bailey (1997)がある。

²⁷⁾ Scott (1995) 参照。

- Fauconnier, Gilles. (1979): *Mental Spaces: A Discourse-Processing Approach to Natural Language Logic*. Unpublished mimeo, Université de Paris VIII.
- Fauconnier, Gilles. (1985): *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge, MA: MIT Press/Bradford. 坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博 (訳) (1996): 『メンタル・スペース：自然言語理解の認知インターフェイス』第2版・白水社
- Fillmore, Charles J. (1975): *An Alternative to Checklist Theories of Meaning*. In: Cogen, C./Thompson, H./Thurgood, G./Whistler, K. (eds.) *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*. Berkeley: Berkeley Linguistic Society. 123-131.
- Fillmore, Charles J./Key, Paul/O'Connor, Mary Catherine. (1988): *Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of Let Alone*. In: *Language* 64, 501-538.
- Fodor, Janet D. (1998): *Unambiguous triggers*. In: *Linguistic Inquiry* 29, 1-36.
- Gardner, Howard. (1985): *The Mind's New Science: A History of the Cognitive Revolution*. New York: Basic Books. 佐伯胖, 海保博之 (訳) (1987): 『認知革命：知の科学の誕生と展開』産業図書
- Gibson, E./Wexler, K. (1994): *Triggers*. In: *Linguistic Inquiry* 25, 407-454.
- Gibson, James Jerome. (1979): *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin.
- Goldberg, Adele E. (1995): *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Gruber, Jeffrey S. (1965): *Studies in Lexical Relations*. Doctoral diss. MIT, Cambridge: Indiana University Linguistics Club.
- Haiman, John. (1980): *The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation*. In: *Language* 56, No.3, 515-540.
- Haiman, John. (1985a): *Natural Syntax: Iconicity and Erosion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haiman, John.(ed.) (1995b): *Iconicity in Syntax*. TSL 6. Amsterdam: John Benjamins.
- Holenstein, Elmar. (1980): *Hintergebarkeit der Sprache: Kognitive Unterlagen der Sprache*. stw 316. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Jackendoff, Ray. (1978): *Grammar as Evidence for Conceptual Structure*. In: Halle, Morris/Bresnan, Joan/Miller, George. (eds.) *Linguistic Theory and Psychological Reality*. Cambridge: MIT Press. 201-228.
- Johnson, Mark. (1987): *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press. 菅野盾樹・中村雅之 (訳) 『心の中の身体』紀伊國屋
- 河上誓作 (1996): 『認知言語学の基礎』研究社
- König, E. (1991): *A relevance-theoretic approach to the analysis of modal particles in German*. In: *Multilingua* 10, 1/2, 63-77.
- Lakoff, George. (1977): *Linguistic Gestalts*. In: *CLS* 13, 236-287.
- Lakoff, George. (1987): *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. 池上嘉彦・河上誓作 (訳) (1993): 『認知意味論：言語から見た人間の心』紀伊國屋
- Lakoff, George/Johnson, Mark. (1980): *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳)(1986): 『レトリックと人生』大修館

- Lakoff, George/Johnson, Mark. (1999): *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Lang, Ewald. (1994): *Semantische vs. konzeptuelle Struktur: Unterscheidung und Überschneidung*. In: Schwarz, Monika. (ed.) *Kognitive Semantik: Ergebnisse, Probleme, Perspektiven*. Tübingen: Narr. 25-40.
- Langacker, Ronald W. (1986): *An Introduction to Cognitive Grammar*. In: *Cognitive Science* 10, 1-40.
- Langacker, Ronald W. (1987): *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990): *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1991): *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1995): *Raising and Transparency*. In: *Language* 71, 1-62.
- Lindner, Susan. (1981): *A Lexico-Semantic Analysis of Verb-Particle Constructions with Out and Up*. Ph.D. Dissertation. San Diego: University of California.
- Ludwig, Petra/Geurts, Bart. (eds.) *Lexikalische Semantik aus kognitiver Sicht: Perspektiven im Spannungsfeld linguistischer und psychologischer Modellierungen*. TBL 439.
- 松原 仁 (1990): 「フレーム問題をどうとらえるか」 In: 『認知科学の発展』 2 , 講談社サイエンスフィック , 155-187.
- Maturana, Humberto R./Verela, Francisco. (1980): *Autopoiesis and Cognition*. Dordrecht: Reidel. 河本英夫 (訳) (1991) 『オートポイエーシス』 国文社
- Miller, George A. (1962): *Some psychological studies of grammar*. In: *American Psychologist* 17, 748-762.
- Miller, George A./Isard, S. (1963): *Some Perceptual Consequences of Linguistic Rules*. In: *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 2, 217-228.
- Miller, George/Johnson-Laird, Philip. (1976): *Language and Perception*. Cambridge: Harvard University Press.
- Münch, Dieter. (ed.) (1992): *Kognitionswissenschaft: Grundlagen, Probleme, Perspektiven*. stw 989. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 中右 実 (1994): 『認知意味論の原理』 大修館
- Pinker, Steven. (1989): *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge: The MIT Press.
- Rickheit, Gert/Strohner, Hans. (1993): *Grundlagen der kognitiven Sprachverarbeitung*. UTB 1735. Tübingen/Basel: Francke.
- Riegas, Volker/Vetter, Christian.(eds.) (1993): *Zur Biologie der Kognition: Ein Gespräch mit Humberto R. Maturana und Beiträge zur Diskussion seines Werkes*. stw 850. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Rosch, Eleanor. (1975): *Cognitive Representations of Semantic Categories*. In: *Journal of experimental psychology, general*, 104, 193-233.
- Schank, Roger C./Abelson, Roger P. (1977): *Scripts, Plans, Goals, and Understanding*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Schwarz, Monika. (1992): *Einführung in die Kognitive Linguistik*. UTB 1636. Tübingen/Basel:

- Francke.
- Schwarz, Monika.(ed.) (1994): *Kognitive Semantik: Ergebnisse, Probleme, Perspektiven*. Tübingen: Gunter Narr.
- Scott, Alwyn. (1995): *Stairway to the Mind: The Controversial New Science of Consciousness*. New York: Springer.
- Smith, Neil./Tsimpli, Ianthi-Maria. (1995): *The Mind of a Savant*. Oxford: Blackwell. 毛塚 恵美子・小菅京子・若林茂則 (訳) (1999): 『ある言語天才の頭脳：言語学習と心のモジュール性』新曜社
- Sperber, Dan/Wilson, Deirdre. (1986/1995²): *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford/Cambridge: Blackwell. 内田聖二・中達俊明・宗南先・田中圭子 (訳) (1999): 『関連性理論：伝達と認知』第2版 研究社
- Sweetser, Eve E. (1988): *Grammaticalization and Semantic Bleaching*. In: BLS 14, 389-405.
- Sweetser, Eve E. (1990): *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高沢 悟・中込和幸・中島平三・萩原裕子 (1997): 「脳生理学から言語処理を見る」In: 『月刊言語』 Vol.26, No.1, 85-97.
- Talmy, Leonard. (1978): *Figure and Ground in Complex Sentences*. In: *Universals of Human Language*. vol.4, Syntax. (ed.) Greenberg, Joseph H. Stanford: Stanford University Press. 625-629.
- Talmy, Leonard. (1988): *Force Dynamics in Language and Cognition*. In: *Cognitive Science* 12, 49-100.
- 田窪行則・稲田俊明・中島平三・外池滋生・福井直樹 (1998): 『生成文法』岩波講座 言語の科学 6 . 岩波書店
- 田中茂範 (1990): 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社
- Taylor, John R. (1989/1995²): *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon. 辻 幸夫 (訳) (1996) 『認知言語学のための14章』第2版 . 紀伊國屋
- Taylor, John R. (1994): *The Two-Level Approach to Meaning*. In: *Linguistische Berichte* 149, 3-26.
- Ungerer, Friedrich/Schmid, Hans-Jörg. (1996): *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London/New York: Longman. 池上嘉彦・河上誓作・ (訳) (1998): 『認知言語学入門』大修館
- 山鳥 重 (1999): 「言語機能の脳内分布：脳の機能マッピング」In: 『月刊言語』 Vol.28, No.3, 98-108.
- 山梨正明 (1995): 『認知文法論』ひつじ書房
- 吉村公宏 (1995): 『認知意味論の方法：経験と動機の言語学』人文書院
- Winograd, Terry/Flores, Fernando. (1986): *Understanding Computers and Cognition*. New Jersey: Ablex. 平賀譲 (訳) (1989) 『コンピュータと認知を理解する』産業図書